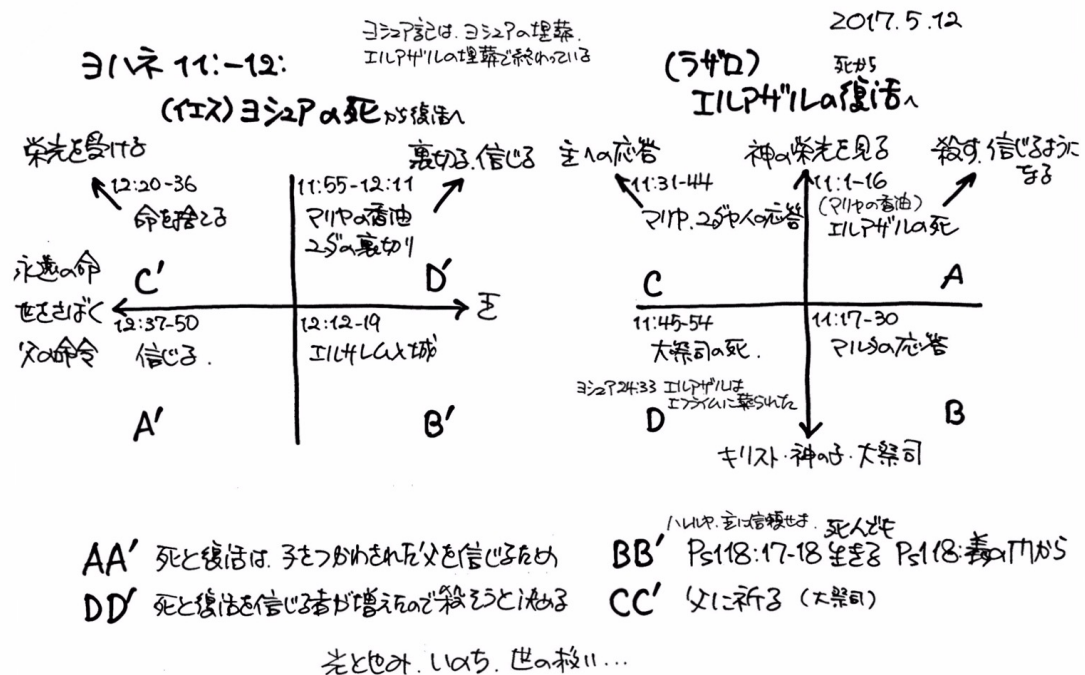




ヨハネ福音書11:-12:



ヨハネ福音書の分析をしています。11章ラザロの死と復活というところから始まって、過ぎ越しの祭りがいよいよ始まります。近づきました。その6日前に(12:1)、その翌日に(12:12)、というところ、11章から12章のところが1つの大きな段落だと思われま

ヨシュア記のラザロという名前は、ギリシャ語ではラザロなのですが、ヘブライ語で言うとエルアザル。エルアザルと言うと、ヨシュアの時代に大祭司として仕えていたアロンの子、エルアザルということ思い出しますね。ヨシュア記の最後は、「アロンの子ヨシュアは死んで葬られました。それでヨセフの骨も移しました。」ということと、最後の最後のところで、「アロンの子エルアザルは死んだ。エフライムに葬った。」というところでヨシュア記が終わります。このヨシュアとエルアザルの死、葬っているということは、復活することを待っているというところで終わっているということです。これは終わりではないですね。この後の復活を待っていると。創世記も各段落が葬るところで終わるのですね。大きな段落は葬るところで終わって、次の人が現れて、ということです。申命記のところもアロンとモーセの死ということで終わっています。ヨシュア記は、ヨシュアとエルアザルの死という葬るところで終わっています。ラザロの復活と言っているのは、そのことを連想するのではないのかなということです。マリヤという名前もミリアムですから、(マルタはどうも違うようだけれど) エルアザルとミリアムがいて、この話が續いているというところですね。

こちらの前半11章の方(右図)は、エルアザルが死から復活すること。それに対して今度(左図)は、ヨシュア、イエス様。新しいヨシュア、イエスの復活が始まる

ですので、まず「ヨシュアの死」というところがここで強調されていると。栄光を受ける時が来る。こちら(右図)も、父の神の栄光を現す出来事だと言って、死と復活ということで、エルアザルとヨシュアということが並行しているのではないかなということですよ。

各4つの段落に分けて見ることができるだろうと思います。ちょっと迷ったのは、この11章55節からのところが、前か、後ろかなと思ったのですが、これは後ろの出だしにしました。ですから、12章と言っているのは、11章55節からの段落と見ています。この2つが1つだよということが分かるのは、ラザロの復活の話をしているのですが、この12章の方にもラザロの話が2箇所(12:9~、12:7)あります。ラザロの話ということで、「過ぎ越しの祭りが近づいたので」と言っている時よりも多分そんなに離れてない時なんだね。ですから、このラザロの復活の話は、まだその話が終わったばかりというところだと思いますけれど、11章からのところは、いよいよ過ぎ越しの祭りが始まるよという一連の話だと思います。こういうところ見ても、この11章と12章には1つだよということが分かると思います。

出だしが、11章も12章もベタニアでの話なんですけど、ここでマリアは香油を塗りましたという12章がその出来事なんだね。このマリアを紹介する文章がこの11章の最初に入っています。この出来事(12章)をあらかじめ言ってるような書き方になっていますので、それもこの11章からと、12章のところからのストーリーが、並行しているということを表しているかなと思います。

4つに分けました。それぞれを4つに分けたこの2つの箇所の真ん中(11:17-30/11:31-44)、(12:12-19/12:20-36)は同じ順番なんですけど、周り(11:1-16/11:45-54)、(11:55-12:11/12:37-50)が逆になっているようなのが、大きなくくりかと思いますね。この最初のラザロの死(11:1-16)というところと、最後の信じる(12:37-50)、神の栄光を見るとの信じる遣わされたということを信じるためだと言っているこの信じる話と、あなた方が信じるようになる為だというラザロの死(11:1-16)は、死じゃないんですよ。神の栄光をあらわすためなんだと。こちら(12:37-50)もイエス様は死ぬとそれは神の栄光のためなんだというところが共通してるかなと思います。

こちら(右図)の最後、最後のところ(11:45-54)は、パリサイ人と祭司長たちがイエスを殺すということなんですけど、これが大祭司が話していますけど、大祭司が死ぬと全てが清められるという特赦の話ですね。大祭司の死は全てのいけにえの一番のもののような事が律法に書かれている通りに、逃れの街から皆解放されたりするんですね。その大祭司の死を預言しているというところです。それはラザロが復活したのを皆が見てしまったので、どんどんどんどん信じる人が増えたということで殺そうとするということです。12章(右図)のここ(11:55-12:11)も、過ぎ越しの祭りが近づいてイエスを捉えて裏切ろうとするのですが、祭司長たちが多くの者が信じて着いて行ったのを見て、ラザロも殺そうとするという、この殺そうとするところが並行しているところと思います。

真ん中のこの段落(11:17-30)と、この段落(12:12-19)は、こちら(12:12-19)は、エルサレムに王として入っていくという方ですね。こちら(11:17-30)は、復活すると言われていたけれどもマルタは信じていると言っているけど信じていないような感じなのです。この箇所でこちら(12:12-19)は引用だということがわかると思います。詩篇118篇からの引用、ホサナのところ。それとゼカリヤからの引用というところです。こちら側(11:17-30)の「イエスは彼女に言われた。私はよみがえりであり命である。生きていて私を信じる者はいつまでも死なない。」ということを行っていますけれど、それは両

方とも118篇の繋がりがあろうということです。118篇で「主に信頼する。主に身を避ける。主を信じる。」ということがここにありますね。主の御名に信頼しているという詩篇です。「義の門よ開け主の門から入る」ということを言っている詩篇で、「私は死ぬことなく、かえって生き、そして主のみわざを語り告げよう。主は私を厳しく懲らしめられた。しかし、私を死に渡されなかった。」というこの箇所は、こちら(11:17-30)の「死んでも生きる」というところにあるところなのではないかなということです。主を信じるというのを主に身を避けると主に信頼するということです、主を信じる者は死に渡されることはないということで、この118篇の預言が成就していると。118篇自体は第5巻のハレルヤの4つに分けたうちの最初のハレルヤの段落の最後。一番のクライマックスのような詩篇ですね。「主に感謝せよ。主はまことにいつくしみ深い。その恵みはとこしえまで。」という詩篇からの引用で、これから、いよいよハレルヤの時になるということで引用されるのは相応しいかなと思いますね。

それと次の段落のところは、ラザロの方の段落(11:31-44)と、過ぎ越しの祭りの6日前、その翌日というところの段落(12:20-36)で、どちらも父に祈る。ここ(11:41)も「父が祈りを聞いてくれる」、ここ(12:28)も「天から声がする」ということが共通しています。父に祈るという者の一番の人物は誰かと言うと大祭司。父に直接祈ることをする。この祈りはこの後17章で出てきますけれども、大祭司の祈りということが、この時にもすでに言われているところだというような共通点があるかなということです。最初と終わりのところに光と闇の話がありましたね。永遠の命の話があります。復活の命があります。世の救い。世をさばく、世を救うという話がありますので、ヨハネの最初の方の3章、4章、5章、6章というあたりとまた比べてみなきゃいけないということが言われているところだと思います。いよいよこの後、弟子たちに最後の説教をして祈って、十字架にかかって、復活するというのが始まるということです。